

にのみやそんとく しょうがい

二宮尊徳は金次郎と呼ばれていました。金次郎は裕福な農家の子として生まれました。しかし不幸にも両親は早くに亡くなり、家は潰れてしまいました。少年金次郎は家をたて直し、ちりぢりとなった弟たちと一緒に暮らすことを望み、一生懸命働きました。そしてついに家をたて直すことができました。

二宮金次郎はどんな少年時代を送ったのでしょうか?
※年齢は満年齢です。

苦勞の始まり……4歳



寛政3年(1791)の夏、暴風雨のため村を流れる酒匂川がはんらんし、二宮家の田畑もほとんど土砂に埋められてしまいました。このときから二宮家の貧乏が始まりました。

父母の死……13歳～15歳



13歳のとき、寝たきりの父が亡くなりました。金次郎は長男として、母・弟2人の一家4人の生計を立てるため、早朝には山で柴刈り、昼は農作業、夜は縄ないやわらじづくりに精を出しました。15歳のときには、母よしがこの世を去りました。その年の6月には川が洪水となり、二宮家の田畑は再び荒れ果ててしまいました。

金次郎の少年時代

誕生

金次郎は、江戸時代後期の天明7年(1787)、今の神奈川県小田原市栢山で生まれました。父は利右衛門、母はよしといい、金次郎はその長男でした。当時の二宮家は、2町(約2ha)をこえる田畑を持つ裕福な農家でした。



父の代わりに……11歳

父が大病にかかってしまったため、金次郎は父に代わって堤防工事に出ることになりました。



仕事が半人前なのに大人たちに申しわけがないと思った金次郎は大人たちに何をしたかな?

ヒント!! エピソードその1



エピソードその1 わらじづくり

11歳のとき、父にかわって堤防工事の人足に出ることになった金次郎は、半人前で申しわけがないと思い、夜なべをしてわらじをつくり、大人たちに使ってもらいました。大人たちから、今時珍しい感心な子だとほめられ、中にはいくらのお金をくれる人もありました。金次郎は、人のために尽くすことは自分の生活が成り立つことにもなるということを知ることになります。

新しい生活……16歳



金次郎は伯父の家へ、二人の弟は母の実家へ引き取られました。新しい生活が始まった金次郎は、身を立てるためには学問よりほかになく、深夜まで読書をするこもしばしばでした。

手放した田畑を買い戻す……18歳～23歳



18歳のとき、金次郎はわが家に戻りました。すっかり荒れ果てた家を修理し、荒れ地を耕し、少しずつ亡き父の田畑を買い戻しました。23歳のとき田畑は1町5反(約1.5ha)に達し、家のたて直しを事実上成し遂げました。

「積小為大」

毎晩独学で勉強していた金次郎は、明かりの燃料となる油を得るため、荒れ地に自分でたった一握りの菜種をまき、7升(約12.6ℓ)の菜種油を得た経験や、捨てられていた苗を大事に拾って、自分で荒れ地を開墾した所に丹精こめて植えて育て、秋には1俵もの稲を収穫した経験から、自然のすばらしさを知るとともに、「小さな努力の積み重ねが大切(積小為大)だ」と学びました。こうした若いころの経験の中から得たものが、後の行いや考え方のもととなりました。



Q. ぞんたい

夜遅くあんどんの明かりで読書をしていると、「百姓(農民)には学問などいらない。油がもったいない。」と伯父にしかられてしまいました。さて金次郎はどうしたかな?

ヒント!! エピソードその2

エピソードその2 菜種で油を得る

16歳のとき、伯父の家に引き取られた金次郎は、夜遅く行灯の明かりで本を読んでいると、「油がもったいない。」としかられてしまいました。そこで、友人からひとにぎりの菜種をもらい、近くの川の土手に植えました。やがて7升の菜種が取れ、それを油にかえてもらい夜の読書を続けました。

エピソードその3 鋤を借りる

家に戻って間もない頃、金次郎には田畑を耕す鋤がありませんでした。そのため隣の家に鋤を借りに行ったところ、いま使っているところでそれが終わったら貸してくれることとなりました。そこで金次郎はただ終わるのを待つのではなく隣の家の仕事を手伝いました。おかげで早く終わった隣の人は喜んで鋤を貸してくれました。

※武士はたくさん名前を持っていました。尊徳とは「名のり」といい、武家の男子が元服のあとに加える名前のことです。大人になっても身分の高い武士からは金次郎と呼ばれていました。
※1町=10反=約0.9917ha、1反=300歩(坪)=約991.7㎡、1歩(坪)は約3,306㎡でタタミ2畳分です。

※菜種…アブラナ(菜の花)の種 ※土手…堤防のこと

いえ なお きんじろう 家をたて直した金次郎のこ
とを 聞いた武士たちは自分の
いえ りょうち 家や領地のたて直しを頼みま
した。 それに応え、金次郎は
つぎつぎ 次々に実施していきました。
 これが後に報徳仕法となり、
またそのなかで 多くの弟子た
ちが できました。



絹本着色 尊徳坐像
 (岡本秋暉筆 報徳博物館所蔵)

ぶんか ねん 文化9年(1812)、25歳のとき、家を
たて直したばかりの 金次郎は、小田原藩
かろうほつりけ 家老服部家から、いえ ざいせい 家の財政のたて直しを
たの 頼まれ、そのたて直しに成功しました。
つぎに 34歳のとき小田原藩主大久保忠真
の命を受け、 分家宇津家の領地である、
しもつけのくに 下野国桜町領(栃木県真岡市)をたて直
すこととなり、 苦勞の末それも成功しま
した。

そのはなしを聞いた多くの武士たちか
らも、 自分たちの領地のたて直しを頼ま
れ、 次々に始めました。その一方、幕府
からも 認められ、農民であった金次郎は
ぶし 武士となりました。そして、66歳のとき
から 幕府の領地である日光(栃木県日光
市)の たて直しを行いました。

エピソード その4 ナスでききを予測

天保4年(1833)の初夏、金次郎はナスを食べて、秋の味がしたことから、冷害が起
こり 作物が育たなくなることを予測しました。そこで農民たちに非常食用の作物として
※ ヒエを作らせたので、実際に冷害が起きて一人の餓死者も出ませんでした。

※ヒエ…イネ科の一年草。種子はやや三角形の細粒。天候不順のときでも育つことから、非常食用の作物として栽培された。
 ※藩…大名が治めていた領地のことです。その中心に城を築き、そのまわりに家臣たちをあつめ城下町をつくりました。

報徳仕法が行われたところ(領主名)

- ① 桜町(小田原藩主分家宇津家)
現在地: 栃木県真岡市
開始年: 文政5年(1822)
- ② 青木村(旗本川副家)
現在地: 茨城県桜川市
開始年: 天保4年(1833)
- ③-1 谷田部藩(細川家)
現在地: 茨城県つくば市あたり
開始年: 天保6年(1835)
- ③-2 谷田部藩(細川家)
現在地: 栃木県茂木町
開始年: 天保6年(1835)
- ④ 烏山藩(大久保家)
現在地: 栃木県那須烏山市
開始年: 天保8年(1837)
- ⑤ 小田原藩(大久保家)
現在地: 神奈川県・静岡県
開始年: 天保8年(1837)
- ⑥ 下館藩(石川家)
現在地: 茨城県筑西市あたり
開始年: 天保9年(1838)
- ⑦ 真岡代官領(幕府領)
現在地: 栃木県真岡市
開始年: 天保13年(1842)
- ⑧ 掛川藩(太田家)
現在地: 静岡県掛川市
開始年: 天保15年(1844)
- ⑨ 中村藩(相馬家)
現在地: 福島県相馬地方
開始年: 弘化2年(1845)
- ⑩ 日光神領(幕府領)
現在地: 栃木県日光市
開始年: 嘉永6年(1853)



二宮 尊徳 年表

年	満年れい	主なできごと
天明7年(1787)		7月23日 小田原藩領栢山村の農家の長男に生まれる。
寛政3年夏(1791)	4	暴風雨のため、近くの酒匂川がはんらんし、二宮家の田畑もほとんど土砂に埋められてしまう。貧乏の始まり。
寛政10年(1798)	11	父利右衛門が大病にかかり、そのため父に代わって堤防工事に出る。
寛政12年(1800)	13	寝たきりの父が亡くなる。
享和2年(1802)	15	母よしが病気で亡くなる。金次郎は伯父の家、二人の弟は母の実家に引き取られる。
文化2年(1805)	18	この頃にはわが家に戻る。
文化7年(1810)	23	少しずつ田畑を買い戻し、この年田畑は1町5反に達し、家をたて直した。
文化9年(1812)	25	この頃、小田原藩家老服部家の財政のたて直しを実施し、成功させる。
文政4年(1821)	34	下野国桜町領の報徳仕法が実施される。
天保2年(1831)	44	桜町領の報徳仕法が終わるが延長され、天保7年(1836)まで行われる。
天保4年(1833)	46	この頃より桜町領近辺の村々で報徳仕法が実施される。
天保8年(1837)	50	小田原藩で報徳仕法が実施される。
天保10年(1839)	52	奥州中村藩士富田高慶が弟子入りする。
天保13年(1842)	55	幕府にめしかかえられ武士となり、「尊徳」を名乗る。
弘化2年(1845)	58	奥州中村藩で報徳仕法が実施される。富田高慶が代理となり指導する。
弘化3年(1846)	59	小田原藩は報徳仕法をやめ、金次郎と領民との接触を禁止する。
嘉永6年(1853)	66	日光で報徳仕法が実施される。
安政3年(1856)	69	10月20日 病気のため亡くなる。

大藤修著「人物叢書 新装版 二宮尊徳」を参考に作成

武士となった金次郎

農民であった金次郎はこれまでの功績から天保13年(1842)55歳のとき武士になりました。そのとき、「尊徳」を「名のり」として幕府に届けました。



二宮家甲冑
 (南相馬市原町区 佐藤重郎氏所蔵)

金次郎の死……69歳



嘉永6年(1853)66歳のとき日光での仕法が開始されましたがそのとき金次郎は病気になるてしまいました。その後安政3年(1856)に69歳でこの世を去りましたが、日光については子の尊行・一番弟子の富田高慶が引きつぎ幕末まで続けられました。その後報徳仕法は彼らによって続けられることになりました。

※幕府…武士のかしらである将軍が開いた役所のことです。江戸時代は将軍徳川家が住んでいた江戸城で行われました。